

宗教における価値の問題

芹 沢 寛 哉

日蓮上人の宗教はいかなる宗教であるかの問いに対して古来多くの見解がある。端的には宗教である以上、知識による理解はいかなる方法によるにしてもその周辺を廻るだけで核心に至ることはできないのは当然であり、やはり「以信得入」でなければならぬであろう。しかしこの信による体験が、首目の信であり、他からの理解も追体験も全く閉ざされているとすれば、それはもはや文化的宗教と認めることはできない。宗教が、万人に開かれたものであるならば、普遍性をもつ知識から理解への道が開かれているとすべきであろう。しかし知識による宗教の理解は方向づけであって核心に至るにはそれを否定的に超越する信による体認でなければならぬ。

この試論はかかる方向づけの試みの一つであり、価値論の立場から巨視的な方法で行なおうとしたものである。

価値の観点といっても、現在あらゆる価値を網羅した完全な価値表をわれわれはもっていない。絶対的に正確な時

計の作製が困難である以上に客観的に完全な価値表の作製は原理的に困難であるが、われわれは、生活し行為をしている限り必ず価値観を予想している。日蓮聖人の場合も、善悪、正邪、方便、真実など価値観を離れては論じ得ないのであり、その宗教の理想も最高の価値の実現であると考へられる所から、何を最高の価値とされていたであろうかを考へることによって、その宗教理解に近づくことができるだろう。

ここでは一指標として現在比較的知られている、M・シエラーの価値表を取り上げてみた。シエラーは五つの指標をもって諸々の価値を測定し価値序列を定めた。それによると、1、物質的有用価値及快適価値、2、生命価値、3、精神的価値（真、正義、美など）、4、宗教的価値（聖）である。1から4に至るほど高い価値であり、またより基礎的、目的的である。1から3までは価値の相対的段階であるが、4の宗教価値は絶対的である。聖の価値は、3以下の俗的価値とは異質であって「無」によって媒介される。

同じく宗教的聖価値も宗教として実現する場合二つの側面があり、それは宗教の二類型に対応する。それは1、神秘的宗教、2、予言者の宗教である。神秘的宗教は靈魂の救済を最高の目的とするもので、そのために役立つ手段は

いづれも容認される。現実から理想へ、周辺から中心へ、上昇的に進む、従って寛容的でありその用うる言語も象徴的である。聖界と俗界は区別され此岸と彼岸は異つた世界である。

これに対して予言者の宗教は、宣布宗教とも云うことができるように、教を宣布することが最高の使命である。従つてその教以外は認めることができないから、不寛容である。その言語も、意味さえ同じであれば表現は手段であるから何でもよいというのでなく、言語はそのまま実体であり、言語と実体とを切りはなすことはできない。俗世界を去つて聖の世界へ行くことが目的ではなく聖の世界を俗の世界へ実現するのであるから聖俗は一つの世界である。聖俗一元は、両者の無原則な妥協ではなく聖を俗に及ぼす強い信と意志が要請される。

一般にキリスト教や回教は後者であり、仏教は前者であるというように、宗教学的な観方がなされているけれども日蓮聖人の宗教がかかる類型的解釈で尽きるものでないことは勿論であらう。

日蓮聖人の遺文から窺はれる諸徴標の多くは予言者の宗教のそれである。例えば

「一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱うべし」(報

恩抄)は宣布であり、「天晴れぬれば地明らかなり、法華を識るものは世法を得べきか」(本尊抄)は聖俗一世界である。「夫撰受折伏と申す法門は水火の如し…」(開目抄)は不寛容であり、「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具定す」(本尊抄)は、象徴に非ず、実体なることを示している。

神秘的宗教における上昇的実存の方向は、尚ほ論理的であり、従つて述門的と云うことができるならば、予言者の宗教の下降的実存の方向は実践的であり本門的であると云へるだらう。

日蓮聖人の宗教をこのような観点から類型的に予言者の宗教だと規定することで、問題は解決するであらうか。この観点から、御遺文全体を読み返して、教学を再編成することは理論的には可能であらうが、それでは尚一面的理解に過ぎないであらうか、そのとき仏教的性格はどうなるか本論では、このような価値の観点から聖人の宗教は予言者の宗教の性格が優位であることを認めながらも、尚ほこれらの観点からのみでは尽すことの出来ないものを見出すことによつて、更に探究を進めなければならぬ旨を喚起したかったのである。